



一般社団法人 **日本LD学会**  
Japan Academy of Learning Disabilities

# 会 報 第128号

一般社団法人 日本LD学会 事務局（業務委託先）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社

URL <https://www.jald.or.jp>

- ・巻頭言：次世代のアセスメントのあり方
- ・第7回研究集会（東京）開催報告
- ・〈連続講座1〉第7回 家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクト
- ・〈連続講座2〉第7回 GIGAスクール時代における特別支援教育
- ・委員会リレー企画 広報委員会紹介
- ・PATIO～実践の最前線～
- ・事務局からのお知らせ



## 次世代のアセスメントのあり方

東京学芸大学

小 林 玄

現代において、実に多くの方がスマートフォンを使用しています。今や社会人や大学生は言うに及ばず、小中学生にとっても大変身近な機器となりました。また、普及率だけでなく、OSが新しくなるごとに高機能になり、その進歩にも驚かされます。しかし、どれだけの人がスマートフォンの高い機能を十分に活用しているのでしょうか。

スマートフォンを心理教育的なアセスメントのツールに置き換えて考えてみましょう。特別支援教育が開始されて以降、教育現場では、アセスメントの重要性が徐々に浸透し、先頃では、「生徒指導提要」の改訂版に、具体的な検査名を挙げてアセスメントについての言及が成されるまでになりました。また近年、いくつかの有用な検査が改訂され、理論的根拠に裏打ちされた、より多角的なアセスメントが可能にもなっておりま。これらの歓迎すべき時代の変化にも、普及と高機能のキーワードが関与しています。

検査の改訂により、支援を必要とする子どもの能力の水準や特性について多くの情報を入手できるようになりましたが、その反面、この有益な情報

を十分に活用するには、教育臨床に携わる者の力量が今まで以上に問われることにもなりました。高機能のスマートフォンが普及したとしても、全てのユーザーがその機能を十分に使いこなせるわけではないのと同じように、検査が普及しても、得られる情報の多さに消化不良を起こしてしまっは、アセスメント結果を適切な支援につなげることは難しくなります。スマートフォンであれば、全ての機能を使わずとも、所有者が自分なりに使用していけば済むわけですが、検査の場合は、検査者が正しい知識とスキルを持ち、検査結果として示された多岐にわたる情報を適切に吟味し、十分に活用する必要があります。また、検査結果を子どもの支援に反映させるためには、検査者から渡されたボタンを確実に受け取るために、子どもの指導を担当する者も検査結果から指導計画を的確に立案していく力が必要になるでしょう。普及と高機能に続く第三のキーワードは「十分な活用」でしょう。

進歩し続ける特別支援教育において、ハードウェアだけでなく、支援者というソフトウェアも次のステージへの進化が求められていると感じています。